朝の学び「主の教会につらなって生きる」

第３回　礼拝（３）礼拝におけるイエス・キリストの臨在

　礼拝における生命的事柄は神の臨在、すなわちその場に神がおられるということです。では、ここに神がおられるということをわたしたちはどのようにして確かめることができるのでしょうか。

　覚えておきたいのは、神の臨在ということは神御自身が起こされることであって、人間が起こしたり、あるいは判定したりすることではないということです。人間の気分や感情によって左右されるようなことではないということです。

　まことの神を拝むことと、偶像の神々を拝むこととを比べてみましょう。偶像礼拝とは人間の手で神々をこしらえ上げることです。そこでは当然、その神をどう礼拝するのかも人間によって自由に、気ままに決められていくことになります。偶像は人間の言いなりです。偶像には命はなく、人格もなく、それゆえ言葉を語ることもできないからです。偶像礼拝においては、神と人間との人格的な交わりは成立しません。その礼拝は結局人間の独り言、独り芝居のようなものになるほかないのです。

　まことの神を信じる信仰においては、神と人間との生ける交わりが生起します。神は聖書の御言葉をもって人間に語りかけます。神は人間に対して「あなた」と呼びかけます。人間もこの神の語りかけを全存在をもって受け止め、神を呼び、神に応答します。つまりまことの礼拝においては、二人称の応答関係が成り立つわけです。

まことの神を信じる信仰においては、その信仰や礼拝のありかたは人間の欲求や流儀によって決められるのではありません。なぜならこの世と人間の救いは神によることだからです。神のよき御心と、その御心にもとづいてこの世における歴史的御業として成し遂げられた御業こそ、わたしたちの信仰の土台です。それゆえ人間が御自身についていかに信ずべきか、また御自身をいかに礼拝すべきかをお決めになるのも神です。まことの礼拝、霊と真理とをもって主をほめたたえる礼拝をささげるための労苦を、教会は担わなければなりません。けれどもそのことをわきまえた上で、礼拝の根拠は神にあることが覚えられるべきです。なぜなら礼拝の主人公は神であり、神の臨在によって礼拝は礼拝となるのだからです。

　主の日の礼拝において、イエス・キリストは聖霊によりその場に臨在されます。わたしたちはわたしたちと共におられる、生けるキリストを仰ぎます。礼拝は神と人との出会いが起こる場です。その意味で、礼拝は出来事です。礼拝が真に礼拝となり得る。それは集まる者たちがイエス・キリストにあって神と出会い、神と交わり、その場にキリストが生きて臨まれ、働かれることによるのです。